

国立国語研究所 令和7年度 第2回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」
合同研究発表会

沖縄語継承の現場にみる 言語使用の多層性

— 小規模学習会における習熟度・談話活動・役割意識の相互作用 —

安元悠子

(沖縄国際大学／学術振興会特別研究員PD)

2026年3月14日

発表の目的と概要

目的

本発表は、沖縄語の継承を目的とした小規模な学習会の映像記録を対象に、参加者間（話者と学習者）の言語使用の実態を記述するものである。分析では、相互行為上の「習熟度」、読み上げや回想、雑談といった「談話活動」、および参加者の「役割意識」という三つの観点を設定する。

概要

事例分析を通じ、場面や相手の理解度に応じて言語選択や説明の多寡が柔軟に調整される一方で、特定の語彙や発音の「正しさ」をめぐる特定の役割意識が喚起されるなど、複数の要因が相互に作用しながら談話が構成される様相を報告する。

発表の流れ

1. 背景と研究者の立場性
2. 小規模学習会の概要
3. 学びの場としての特性
4. 方法論的立場 – 言語エスノグラフィー
5. 分析の三観点と言語使用の記述方針
6. 事例分析
7. 考察・まとめ

背景

発表者は、沖縄島中南部で話者主体でおこなわれている言語継承活動について2023年から活動に参加しながらフィールドワークを続けている。

- どのような団体があるのか
- 活動がどのようにおこなわれているのか
- どのように組織されているのか
- 構成員がどのような目的意識を持っているのか
- どのような困難があるのか

参加している言語継承活動団体

「島くとうば普及友の会浦添」

活動場所：浦添中央公民館



3団体は2023年8月から参加、継続中。

「南城市文化協会 東方うちなーぐち会」

活動場所：大城集落センター



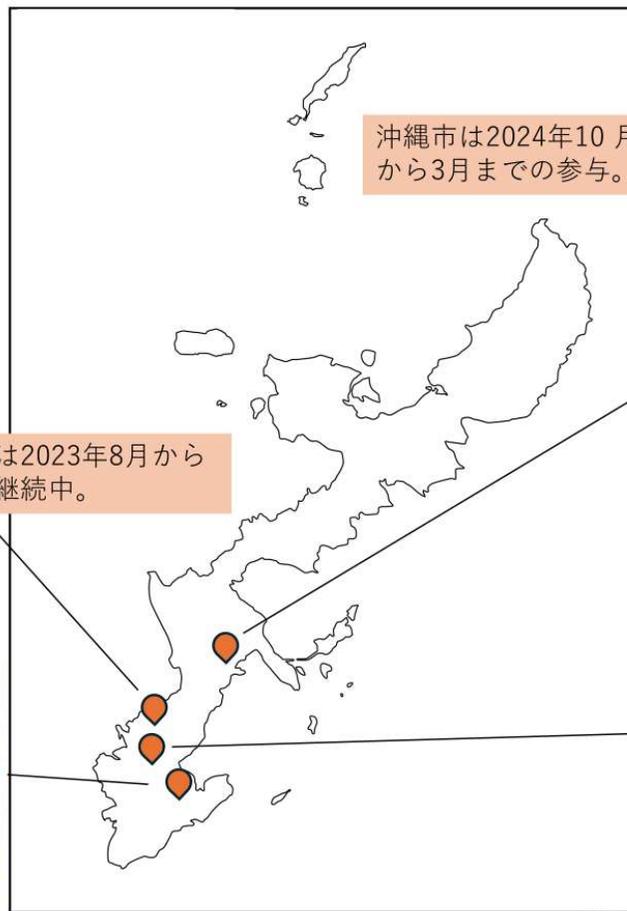
「沖縄市文化協会しまくとうば部」

活動場所：沖縄市社会福祉協議会



「繁多川島くとうば会」

活動場所：那覇市繁多川公民館



沖縄市は2024年10月から3月までの参与。

小規模学習会の概要

この学習会は、研究者の意図で始まったものではなく、言語継承活動コミュニティの中で「若手がしっかり継承するには小規模の学習会が必要だ」という目的意識から発足

	出身	年代・性別	ことばのルーツ
話者A	那覇市	80代 男性	首里ルーツ
話者B	那覇市	80代 女性	那覇ルーツ（旧那覇区）
学習者C	那覇市	40代 女性	← 発表者
学習者D	糸満市	40代 男性	

首里・那覇のことばを基とする小規模学習会（2024年11月～2025年9月）の録画データ 

本発表の録画データについて

全データ：12時間超（2024年11月～2025年9月） → 本発表：1回分・約1.5時間（2024年11月2日） → 抽出事例：3場面

映像データの倫理的論点については Derry et al. (2010) も参照。

話者A自身が作成した例文集（首里・那覇のことばによる会話テキスト）をもとに学習会は進行する。
テキストの読み上げを起点に、発音指導、回想語り、メタ言語的議論など多様な談話活動が派生する。

研究者としての立場性

◎ 所与の当事者性

親世代から言語を継承することのなかった、言語衰退プロセスの当事者

◎ 選び取った当事者性

危機言語としての沖縄語を新たに学ぶ「ニュースピーカー」としての当事者

・ 話者世代の言語継承コミュニティは、意図的に関わろうとしなければ見えない閉鎖性の高い領域

本研究における位置づけ

発表者は学習会の「学習者C」として参与しながら映像記録を行っている。

分析対象である相互行為の当事者であると同時に、それを記述する研究者でもある。

→ この二重性を自覚的に扱うことが、言語エスノグラフィーが重視する内省性（reflexivity）の実践となる

方法論的立場 — 言語エスノグラフィー

言語エスノグラフィー (Linguistic Ethnography)

言語学と民族誌的手法を統合し、社会生活における言語の役割を探求するアプローチ
固定された学問分野ではなく、共通の関心を持つ研究者の「アプローチ」

言語学がもたらすもの

- 言語使用の細部への鋭い注意力
- 精密な分析を可能にする分析ツール
- 意味生成プロセスの記述

エスノグラフィーがもたらすもの

- 研究者自身の役割に対する内省性
- 当事者の視点 (emic perspectives) への注目
- 文脈に根差した深い理解、複雑さへの開放性

Tusting (2019) の抜粋 (“What is linguistic ethnography?”, lingethnog.org) ; Rampton et al. (2004)

本研究との接続：発表者自身が学習者として参与する継承活動の現場を、言語使用への注意と活動の文脈理解の両面から記述する

「固定」と「開放」— 本研究への援用

Rampton et al. (2004) の中心概念

固定 (tying down)

特定の場面の言語使用を、具体的な証拠に基づいて記述する

開放 (opening up)

言語データを、より広い社会的文脈や不確実性のなかに位置づける

本発表における「固定」と「開放」

	本研究での実践
固定	学習会の映像データから特定の場面を取り出し、言語使用の実態を内容的に記述する
開放	話者の背景（地域・階層・ジェンダー）、言語の威信性、参加者間の関係性を考慮に入れる

→ 話者の出自・ジェンダー差・規範意識などが「開放」の基盤となる

分析の三観点

①②はデータ観察に基づく記述的観点、③は言語イデオロギー論を参照した解釈的観点である。

① 習熟度の差異

話者と学習者の運用能力の差が、説明の量や言語の調整として場面ごとに現れる

② 談話活動の種類

テキスト読み上げ、発音指導、回想語り、雑談などを帰納的に分類。活動によって言語の配分が異なる

③ 役割意識の動的な構成

表層：「教える人／学ぶ人／橋渡し役」が活動の推移で動的に入れ替わる

深層：言語の担い手としての規範意識

「正しい発音・語彙を知っている」自負、辞書や外部権威に対して自らの実践を対置する姿勢

地域・ジェンダー・階層に根ざした「自分のことば」への帰属意識

Woolard (1998); Gal (2012)

言語使用の記述方針

本データでは、沖縄語と共通語を二つの離散的なコードとして前提し、明確な切り替え点を同定することは難しい。そこで本発表では、コードスイッチングの枠組みを直接適用するのではなく、音声・語彙・言い回しなどの諸要素が、場面や相手に応じて現れる様相として記述する。

(Blommaert & Backus 2013; Blommaert & Rampton 2011)

沖縄語的要素

共通語的要素

← 場面・相手の習得度に応じて、沖縄語的要素／共通語的要素の現れ方が変動 →

観察される傾向：

- 話者同士のやりとりでは、沖縄語的要素が比較的濃く現れる
- 話者から学習者への説明では、共通語的要素が増えるが、すべて共通語にはならない
- 言語形式の現れ方は、読み上げ・雑談・回想などの活動類型によって異なる

学びの場としての特性 — 言語の社会階層差を知る

首里方言の著しい特色として、階級（士族／平民）による言語差が大きいことが挙げられる。親族呼称においても士族と平民では異なる語形が用いられた。

親族呼称にみられる士族と平民の違い

	おじいさん	おばあさん	おとうさん	おかあさん
士族	taNmee	?Nmee	taarii	?ajaa
平民	?usjumee	haamee	sjuu	?aNmaa

国立国語研究所（2001 [1963]）『沖縄語辞典』（p.19）より一部抜粋

学習会の事例：「太郎」の読み方（マーカー17）

話者A：「太郎」はウチナーグチで [taru:] と [tara:] と呼び方がある。

[taru:] が士族の言い方、[tara:] が平民の言い方。

「どっちでもいい」（相手や場面によってどちらを選択してもよい）としてテキストには漢字「太郎」を採用。

⇒ 辞書には載っていない階層差の知識が、話者の身体知として学習会の場に持ち込まれている。

話者作成テキストと本発表の焦点

学習会の成り立ちとテキスト

この学習会は、研究者の意図で始まったものではなく、言語継承活動コミュニティの中で「しっかり継承するには小規模の学習会が必要だ」という話から生まれたものである。話者Aが自ら作成した会話テキスト（首里・那覇のことば）は、話者とともに学ぶ前提の作りになっている。話者の言語体系・生活世界・文化的知識が埋め込まれており、話者による言語知識のテキスト化（Barber 2012）として捉えることができる。

本発表の焦点

学習会はテキストの読み上げを起点に進行するが、そこから発音指導、回想語り、メタ言語的議論など多様な談話活動が派生する。本発表では、テキストそのものではなく、テキストを起点に派生する談話部分に着目する。

※ 本研究は、分析に着手する時点で参加者全員から映像記録および研究参加の承諾を得て実施している。

事例1:発音指導(マーカー9-12)

テキストの読み上げから派生した発音指導の場面。話者Aが沖縄語に特徴的な音の区別を説明し、学習者が習得しようとする過程。三観点すべてが交差する事例。

トランスクリプト (抽出)

※表記は便宜上、共通語的部分を漢字仮名交じり、沖縄語的要素が比較的強く現れる部分をひらがな中心で示す。なお、これは厳密な境界を示すものではない。音声差が重要な箇所のみIPAを付した。

話者A : たといどうんしえーよ。目下への返事は [ʔi:] でいいしえー、[ʔi:, ʔaNjasa.]

これははっきりと [ʔi:]。「はい、そうだよ。」という。

やしが「嫌」というのは [ji:ji:] というわけ。

だから映画も [je:ga] という。これは [jeisa:]。いまは [eisa:] というでしょ。

本当は [jeisa:] なのよ。これが正しい発音。[eisa:] あらん。[jeisa:]。

学習者C : 「イエ」でもないですね。

話者A : [je:]. [je:]. [je:]. (繰り返し)

学習者D : [jeisa:]?

学習者C : ほお、[e]と[je]の間みたいです。おもしろい。

話者A : そう聞こえる? ははは。

話者B : [jeisa:]。

学習者D : [eisa:]? [jeisa:]?

話者B : (微笑んでいる)

話者A : 八重山のことをウチナーグチでなんと言う?

学習者D : [je:ma]?

話者A : [je:ma]でしょ? [ʔe:ma] あらんしえーやー。あり [je:] るやさ。

学習者D : [jeisa:]、[je:ma]。[jeisa:]、[je:ma]。(繰り返し練習)

事例1: 三観点からの分析

▶ 音声指導の場では、規範意識が“正しい発音”として前面に出る

① 習熟度の差異

話者Aは一貫して [jɛ]（開いた母音）で発音するが、学習者Dは [je] で模倣し、母音の開きを再現できていない。学習者Cは「[e:] と [je] の間みたい」と分析的に感想を述べるが、これもその時点で話者の [jɛ] とは異なる。三者の音声的な「着地点」がそれぞれ異なる。

② 談話活動の移行

[ʔi:] と [ji:] の対立の説明 → [jeisa:] の実演と「正しい発音」の主張 → 学習者Cの音声的観察（「おもしろい」） → 地名 [je:ma]（八重山）による補助線 → 繰り返し練習。教示から身体的トレースへと活動が移行。

③ 役割意識の動態

表層：話者A・Bが「教える側」として機能。話者Bは [jeisa:] と発音し、学習者の練習を微笑みながら見守る「橋渡し役」。

深層：話者Aは [eisa:] を明確に否定し [jeisa:] を「正しい発音」とする。共通語化によって失われつつある本来の音を学習者に伝えようとする姿勢であり、話者が内面化している首里方言の音の規範意識が現れている。

※ 沖縄語辞典（内間 2006）の凡例 x (7) では、「喉頭破裂音を伴わない [e] [o] が語頭にくる場合の音価は、それぞれ [je] [wo] に近い」と記述している。本事例で話者Aが問題にしている音は、この記述に対応するものと考えられる。

事例2:ジェンダー差と辞典とのずれ(マーカー20-21)

「正月」の読み方をめぐる議論。話者Aがジェンダーによる発音差を指摘し、辞典の表記と自分たちの実態とのずれを論じる。話者Bが自身の言語使用と経験で裏付ける。

トランスクリプト (抽出)

※表記は便宜上、共通語的部分を漢字仮名交じり、沖縄語的要素が比較的強く現れる部分をひらがな中心で示す。なお、これは厳密な境界を示すものではない。音声差が重要な箇所のみIPAを付した。

話者A : あの一、Bさんた一、うりぬ一んでいいちよーが。[so:gwatʃi] んでいいちよーみ。[jo:gwatʃi] んでいいちよーみ。
[[jo:] どうやるい、[so:] どうやるい。

話者B : [ji: so:gwatʃi]。[so:] を使いますね。

話者A : くれ一、すいんじゃよ一、ひ一、[so:gwatʃi] んでいいいね一、いなぐくとうばやるば一。
いきがや [jo:gwatʃi]。

と一、あの辞典ひちま一、「sjoogwaçi」(『沖縄語辞典』国立国語研究所 2001 [1963]p.489) など一ん。

学習者C : 『沖縄語辞典』ですか？

話者A : そう。あれは [jo:gwatsi] になってる。

話者A : 学問は男がやるもんだから、女はやらないでしょ。だから男ことばと分かれるわけ。
首里でもいきがは [jui] と言うし、いなぐは [sui] と言うし。
わった一は [sui] と使ってるよ。ことばは母親から習うから。

話者B : 女性はさ、ほとんど、ご主人が子どもに教えるのを外で聞いているだけ。
だけど、覚えるわけ。覚えてそれを(夫が)いないときには教えることができるわけ。
そのときには女ことばで、やーたい(話者Aに同意を求める)、子どもに教える。
私はいつも [so:gwatʃi] と使っている。女ことばを使っている。

事例2:三観点からの分析

▶ 辞典的権威と身体知のずれが、ジェンダー的観点からの語りとして現れる

① 習熟度の非対称性

話者A・Bは [so:] と [jo:] のジェンダーによる使い分けを体系的に認識しているが、学習者にはこの区別自体が未知である。辞典にも十分に反映されていない、話者の身体知としての知識。

② 談話活動の移行

テキスト読み上げ → 話者Bへの発音確認 → ジェンダー差の説明（いなぐくとうば／いきがくとうば） → 辞典との照合とずれの指摘 → 言語継承の経路（「ことばは母親から習う」） → 話者Bによる女性の言語継承役割の語り。メタ言語的議論から経験語りへと活動が移行。

③ 役割意識の動態

表層：話者Aが話者Bに発音を確認し、話者Bが自身の言語使用で裏付ける「情報提供者」として機能。さらに話者Bは女性の言語継承役割を語り、「橋渡し役」を超えた役割を担う。

深層：話者Aは辞典を日常的に参照し権威として認めつつも、辞典が記録した時代・話者（1950年代調査）と自分たちの世代の実態との「ずれ」を指摘。士族ルーツの男性でありながら「わったーは [sui] と使ってるよ。ことばは母親から習うから」と、辞典的知識と母親経由の身体知が共存する規範意識の複層性が現れている。

※ 『沖縄語辞典』（国立国語研究所 2001 [1963]）の解説によれば、士族の成年男子はsのほかにsj= [j]音素を持ち、平民や女性・子どもはこの区別を持たない。辞典の音素表記は士族男子の発音を基準としている。

事例3:橋渡しと協働的探求(マーカー22・23・24)

話者Bの役割が多面的に現れる一連の場面。教授者・協働探求の仲介者・翻訳者として場の進行を担う。

トランスクリプト (抽出)

※表記は便宜上、共通語的部分を漢字仮名交じり、沖縄語的要素が比較的強く現れる部分をひらがな中心で示す。
なお、これは厳密な境界を示すものではない。音声差が重要な箇所のみIPAを付した。

話者B : この [niɸe:ɟasa] っていうのもやっぱり目下に言うことば。

普通は [niɸe:de:biru] (敬体) でしょ。「ありがとうございます。」。下に使うときは [niɸe:] です。

話者A : これいまはみんな [niɸe:de:biru] ってなってるけど、昔は [mi] を使っていた。[niɸe:de:biru]。これが変化した。

話者B : (学習者Cに向かって) あんしが、[mi] は奄美大島にあったよね？

学習者C : あ〜、沖永良部では [mihedirodo:] って言ってましたね。

話者B : そうそうそう。

学習者C : 石垣は [mi:haiju:] って言ってたかも。

学習者D : あんしえー、最初は [miɸe:] ?

話者A : うん、だからここ (沖縄島) でも [miɸe:]。「御」というのは「み」と読むさーね。

(終了の時間が近づく)

話者A : うまーし、うっささーしむるばー？ (学習者二人が意味が理解できず反応なし)

話者B : ここで終わりでいいですか？ (自分の発言のようにして訳して対応してくれた)

学習者C : はい、大丈夫です。(Bの対応に気が付いていない)

事例3:三観点からの分析

▶ 橋渡し役は単なる補助者ではなく、場を再編する中心的存在である

① 習熟度の非対称性

マーカー23では学習者Cが沖永良部・石垣での実体験を通じて広域的な知見を場に提供する。一方、マーカー24では学習者が話者Aの沖縄語を理解できない。習熟度の非対称性が場面によって異なる方向に現れる。

② 談話活動の移行

話者Bによる敬体／常体の説明（22）→ [niŋe:] の語源をめぐる協働的探求（23）→ 翻訳を介した会の終結（24）。教授から探求へ、そして日常的なやりとりへと活動が移行。

③ 役割意識の動態

表層：話者Bの役割が多面的に変化。敬体／常体を教える「教授者」（22）→ 学習者Cの他地域での経験を知った上で意図的に引き出す「仲介者」（23）→ 話者Aの沖縄語を自分の発言のようにして共通語に置き換える「翻訳者」（24）。

事例1・2では「橋渡し役」「微笑みながら見守る」存在だった話者Bが、ここでは場の進行を積極的に担う中心的存在として前景化。「教える／学ぶ」の固定的な関係ではなく、参加者全員の知識・経験が循環する協働的な学びの場が生まれている。

考察 一 三観点の相互作用

習熟度の非対称性は一方向ではない

話者から学習者への知識伝達だけでなく、学習者の他地域での経験が場に持ち込まれる場面もある（事例3）。非対称性の方向は場面によって変わり、その調整が談話活動の種類を規定する（事例1）。

談話活動の移行が役割意識を動かす

発音指導から身体的トレースへ（事例1）、メタ言語的議論から経験語りへ（事例2）、教授から協働探求へ（事例3）と活動が移行するたびに、参加者の役割関係も再編される。これらは参加者間の高度な相互調整の現れである。

役割意識の深層と表層は異なるレベルで作動する

表層の「教える／学ぶ」関係が動的に変化する一方で（事例3）、深層では辞典的知識と身体知の複層的な規範意識が持続的に作用している（事例2）。三観点は独立ではなく、相互に絡み合いながら言語継承活動の現場を形作っている。

まとめと今後の課題

本発表のデータについて

全データ：12時間超（2024年11月～2025年9月） → 本発表：1回分・約1.5時間（2024年11月2日） → 抽出事例：3場面

この3事例から見てきたこと

首里・那覇のことばをベースとした言語継承活動は、他地域と比較すれば広範囲で活発になされているように見える。しかしその内実は、話者と学習者がかなり高度な調整を重ね、お互いの知識・経験・感情を配慮しながら進められている。それは決して容易なことではない。

今後の課題

複数回の学習会データを横断的に分析し、三観点の相互作用のパターンをより体系的に記述する。特に、学習者の習熟度の変化、役割関係の変化、談話活動の多様化といった縦断的な変化を追跡することで、言語継承活動の現場がどのように形作られ維持されているのかを描き出したい。

謝辞

本研究は、沖縄語学習コミュニティの皆さまのご協力によって成り立っています。

活動の様子を記録し、研究に用いることを許可して下さった話者および学習者の皆さまに、深く感謝申し上げます。



付記：本発表は、特別研究員奨励費（25KJ0380）の成果の一部である。

参考文献

- Barber, K. (2012). Interpreting texts and performances. In R. Fardon et al. (Eds.), *The SAGE handbook of social anthropology* (pp. 69–83). SAGE.
 - Blommaert, J., & Backus, A. (2013). Superdiverse repertoires and the individual. In I. de Saint-Georges & J. J. Weber (Eds.), *Multilingualism and multimodality: Current challenges for educational studies* (pp. 11–32). Sense Publishers.
 - Blommaert, J., & Rampton, B. (2011). Language and superdiversity. *Diversities*, 13(2), 1–21.
 - Derry, S. J., Pea, R. D., Barron, B., Engle, R. A., Erickson, F., Goldman, R., Hall, R., Koschmann, T., Lemke, J. L., Sherin, M. G., & Sherin, B. L. (2010). Conducting video research in the learning sciences: Guidance on selection, analysis, technology, and ethics. *Journal of the Learning Sciences*, 19(1), 3–53.
 - Gal, S. (2012). The role of language in ethnographic method. In R. Fardon et al. (Eds.), *The SAGE handbook of social anthropology* (pp. 38–53). SAGE.
 - Rampton, B., Tusting, K., Maybin, J., Barwell, R., Creese, A., & Lytra, V. (2004). UK linguistic ethnography: A discussion paper. UK Linguistic Ethnography Forum.
 - Woolard, K. A. (1998). Introduction: Language ideology as a field of inquiry. In B. B. Schieffelin, K. A. Woolard, & P. V. Kroskrity (Eds.), *Language ideologies: Practice and theory* (pp. 3–47). Oxford University Press.
 - 国立国語研究所（2001 [1963]）『沖繩語辞典』財務省印刷局。国立国語研究所学術情報リポジトリ、DOI: 10.15084/00002266.
 - 内間直仁・野原三義（2006）『沖繩語辞典 那覇方言を中心に』研究社。
 - Language and Ethnography Forum. (n.d.). “What is linguistic ethnography?” 最終更新2025年3月16日。 <https://www.lingethnog.org/definition>
- ※ Tusting, K. (Ed.). (2019). *The Routledge handbook of linguistic ethnography* からの抜粋を含む。

国立国語研究所 令和7年度 第2回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」
合同研究発表会

ご清聴ありがとうございました

2026年3月14日